

2019年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	伊藤 恵美子
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程修了	博士 (学術)	日本語教育学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

受講生一人ひとりが受講開始時より確実に学力が向上し、人間的にも成長して校訓「真面目」が実行でき、「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」になるよう指導する。

(計画)

教職員の心構え「子弟を教育するは、私事に非ず。天に事うるの職分なり」を常に念頭に置き、受講生のレディネスを調査して、本学の学生に合致する教授法を検討・実施する。

○担当科目（前期・後期）

(前期)

日本語表現Ⅰ、アカデミック・ライティング、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ

(後期)

日本語表現Ⅱ、異文化コミュニケーション、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ

○教育方法の実践

・「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」

昨年度と同様に、講義形式ではなく、アクティブ・ラーニングで授業を進めた。最終授業で学生に行った振り返りのアンケートには「内容はすごく勉強になりました。私の中ではすごくむずかしかった。すごく頭をひねった感じの授業でした」「日本語力が上がって授業をとってよかったと思う」「レポートや話し言葉と書き言葉の使い分けは将来に役立つと思う」「ポスター制作・発表を実際にやることで積極的に授業に参加できた」「一般的な講義よりも、アクティブ・ラーニングのほうが楽しくて、自分から行動することの大切さを知りました」「私にとっては少し難しいなと思うことがありましたが、先生の授業を通してたくさんのことを学べてとてもためになりました。とても楽しかったです」等々、内省して気づいたことが素直に綴られていた。専門外の科目なので授業準備に細心の注意を払ったが、授業は成功、目標は達成できた。

・「アカデミック・ライティング」

科目の配当順次、言い換えればシラバス記載の科目番号では「アカデミック・ライティング」は「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」を修めた学生が履修する科目である。しかし、現実には「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」未履修の学生のほうが多かったので、授業は基本的な項目から導入せざるを得なかった。教務ガイダンスで学びの系統性に言及があれば、学生はその重要性を理解するのではないか。

・「異文化コミュニケーション」

木曜日、金曜日と連続して同じ内容の授業を行った。今年度も木曜日クラスは授業に前向きな学生が多く、活発なクラスワークができた。当然であるが、学生の成績も良好であった。それに対して、金曜日クラスは某学科の学生が集団で履修、数人の学生は毎週のように授業中に入退室を繰り返した。後期開講科目なので季節から風邪・インフルエンザ等で体調を崩す学生も

いたため（一人ひとりに確認していたら授業を何度も中断しなければならないので）自由にさせていたが、昨年度入退室を繰り返した学生は最前列になるよう座席指定したところ、学生の精神的な成長も与ったのだろうが、受講態度は改善した。

・「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」

今年度は、大学祭のポスター展示、レポート作成、基礎演習発表大会を大きな目標として授業運営を行った。ポスター展示はグループOKだったので、アイデアを出した一人の学生に任せて、その他の学生は消極的だった。同様に、発表大会もゼミ代表の学生と代表に任せて何もしない学生に分かれた。それに対して、レポート作成は個人作業だったので、全員が取り組み、その結果として一人の学生が表彰された。たいへん喜ばしい。各ゼミ代表のレポートを読んでレポート指導を何もしていない教員の存在が露見したが、ポイントを押さえて指導を行えば、学生はそれに応えてくれ、1年生でもレポートが書ける（教育効果がある）ことも、また確認できた。

・「総合演習Ⅰ・Ⅱ」

卒業研究に向けた前段階として、視野を広げて現代社会（日本だけでなく国際社会）に関する知識を豊かにし、その背景も理解できることを目的にした。受講生は新聞を読んで「私が選んだ今週のニュース」としてクラスでプレゼンテーションを行い、学期末にはレポートにまとめた。フェイクニュースを見極め、ニュースの背景を読み解くことができるようになるために、2週連続で同じテーマを扱うこととしたが、中等教育を（形式ではなく本来の意味で）修めていない学生は一瞬のプレゼンテーションはこなせても、継続して考えることができない。これが問題である。

○作成した教科書・教材

なし

○自己評価

2019年度教育活動の自己評価としては、昨年度に続いて「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」を挙げたい。この科目は国語教育（日本人に母語の日本語を教える分野）のテリトリーであるが、昨年度から受け持つことになった。選択科目で木・金曜日1時限配置であった。合格者は木曜日クラス93.9%、金曜日クラス77.5%と差があるものの、欠席しないで課題に真面目に取り組んだ学生は、上記のアンケートからわかるように、確実に日本語の表現力が向上した。学生の満足度の向上、教育効果の上昇が、良い授業、楽しい授業を生み出した。（授業の内容・レベルに差を設けていないにもかかわらず金曜日クラスの合格率が低い要因として、「異文化コミュニケーション」と同様に、同じ学科の学生が多数履修、勉強への姿勢が良くないことが考えられる）

Ⅱ 研究活動

○研究課題

- (1) 応用言語学の課題「第二言語教育のコミュニケーション能力の育成」（究極課題）
- (2) 応用言語学の課題「第二言語習得と母語習得」（究極課題）
- (3) 大学教育の課題「アカデミックスキルの養成」（継続課題）

○目標・計画

（目標）

周辺分野の最新の研究動向を把握して、研究課題に挑む。

（計画）

- (1) 母語とアイデンティティの関係を分析する。

- (2) 言語習得の射程を広げて考察する。
- (3) アカデミック・ライティングについて実践、及び分析を進める。

○2012年4月から2020年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

（学術論文）

- ・伊藤恵美子「台湾人」という意識：若者のアイデンティティはどこから来たのか？どこへ行くのか？」愛知東邦大学『東邦学誌』、第45巻第1号、2016年6月、79-89頁
- ・伊藤恵美子「外国人留学生の日本語学習の歩み：入学後2年間を中心に」愛知東邦大学『東邦学誌』、第44巻第1号、2015年6月、43-62頁
- ・伊藤恵美子「異文化トレーニングを体験した学生の変容：振り返りから認識した異文化コミュニケーション」愛知東邦大学『東邦学誌』、第42巻第2号、2013年12月、1-14頁
- ・伊藤恵美子「日本語習得における中等教育と高等教育の連携効果：ユウキ・ナツミとサキ・イケの表現力から」愛知東邦大学『東邦学誌』、第41巻第2号、2012年12月、101-114頁

（学会発表）

- ・（国際学会）伊藤恵美子「台湾人の意識：若者のアイデンティティはどこから来たのか？どこへ行くのか？」ICJLE2014日本語教育国際研究大会（University of Technology, Sydney）2014年7月11日（審査付）

（特許）

（その他）

- ・伊藤恵美子「コミュニケーション能力の萌芽：言語習得を幼児の母語習得の側面から」愛知東邦大学『東邦学誌』、第46巻第2号、2017年12月、169-176頁

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・伊藤恵美子〔研究代表者〕平成23～25年度 科学研究費補助金（基盤研究（C））「アジアの言語のポライトネス：台湾人について」（課題番号：23520641）採択

○所属学会

日本語教育学会会員、社会言語科学会会員、留学生教育学会会員、日本コミュニケーション学会会員

○自己評価

研究課題(3) 大学教育の課題「アカデミックスキルの養成」について、担当科目「日本語表現Ⅰ・Ⅱ」で実践したアカデミック・ライティングの教育効果を受講生に調査した。学生が提出したアンケートを集めて、分析、そして論文につなげていきたい。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

入試問題作成委員会委員長として新たに策定した計画（1）～（4）を実行する。

（計画）

- (1) 2020年度に新しく開始される大学入学共通テストに向けて、各科目の問題作成取りまとめ役に行ったヒアリング（記述式問題等）を盛り込む方向で試験問題の検討に着手する。
- (2) 不祥事の根本的な対策の一環として、入学試験問題の作成（作問・印刷）の外部委託等の措置を一部の科目で講じる。

- (3) 良問の作成と人材育成の観点から作成者の交代を図る。
- (4) 試験問題の公開に向けて、テストの信頼性・妥当性を担保して問題点検に責任を持たせるため、各試験科目の担当者として委員（教員）を一人ずつ配置する。

○学内委員等

入試問題作成委員長

○自己評価

今年度行った主な事業内容は、以下のとおりである。

- ・良問の作成と人材育成の観点から作問者を大幅に交代し、昨年度出題ミスがあった英語と日本史は一部の日程で外部委託を導入した。
- ・テストの信頼性・妥当性を担保して問題点検の体制を盤石化するため、各試験科目のチェック担当として委員（教員）を二人ずつ配置した。その結果、一般入試Ⅲ期の学内作成問題で誤植が一か所見られたものの、全体として大きな不祥事は生じなかった。
- ・試験問題の公開に向けて、選択科目の公平性に鑑み社会科科目の出題形式を（日本史と政治・経済を世界史に準じて）統一した。
- ・長年の懸案事項であった入試問題作成手当を改定（サーバ設定・小論文作成手当の創設、数学・基礎学力作成手当の改正）した。

昨年度の計画に基づいて実行できた。

IV 社会貢献

○目標・計画

（目標）

大学教員として科学的研究を進め、研究成果を広く社会に還元する。（継続目標）

（計画）

所属学会の論文査読等を通して後進の育成に力を尽くし、学術の発展に貢献する。（継続計画）

○学会活動等

- ・日本語教育学会：学会誌『日本語教育』学会誌委員（主査）、審査運営協力員
- ・社会言語科学会：学会誌『社会言語科学』査読協力者
- ・留学生教育学会：学会誌『留学生教育』査読協力者
- ・第二言語習得研究会：学会誌『第二言語としての日本語の習得研究』査読委員
- ・国際学会 Sydney -ICJLE2014：発表論文査読協力者
- ・国際学会 Bali-ICJLE2016：発表論文査読協力者
- ・国際学会 Venezia -ICJLE2018：発表論文査読協力者

○地域連携・社会貢献等

地域連携には該当せず

○自己評価

日本語教育学会学会誌『日本語教育』の査読に2009年から携わり、2013年に学会誌委員会委員の主査（世界で30人）に就任し、世界中から投稿される論文の査読を行っている。2019年度は『日本語教育』への投稿論文2本、秋季大会の口頭発表10本の査読に携わった。今後の学術の発展、及び日本語教育学の研究促進を世界最高レベルで担っており、大学教員として社会貢献を十分に果たしてきた。学会活動は、広告のような商業ベースと異なり、高等教育機関としてあるべき本来のアカデミックな側面において本学の知名度向上に貢献するものなので、高く評価できよう。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

クレド「人間としての尊厳を持ち、前へ進む」を携えて、建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」に取り組む。

VI 総括

大学教員としての活動の四分野において、目標に向けて具体的な計画が達成できた。特に大学運営に関して、入試問題作成委員会の新体制の構築、及び実行に休日返上で注力した。入試が続く下半期は緊張の連続であったが、大きな不祥事はなかった。外部委託への道を開き、数年来の懸案事項（手当）も解決できたので、一定の成果が出せたと言える。

以 上